

八朔や身にいくたびのいなびかり

藤田湘子

稲光のスリルは嫌いではない。思い出した景がある。ある年の花火の夜「一天俄かにかき曇り」とはこのことか、と思うような雲行きで、西の空が真つ暗になった。閃光が走り、目の前に椰子の木のシルエツトが立つた。光りと共に信じ難い爆音が続き、世の中はこんなにも明るいのかと思うほどに、暗闇の中でいくたびも稲光に照らし出された。すぐに抜けるような雨脚が走った。はつきりとした形の、稲妻の衝撃的な美しさに見惚れた。

八朔は旧暦八月朔日。朔日は一日。つまり旧暦の八月一日のことであり、陽暦では九月初旬に当たる。湘子の好きな「秋はじめ」である。秋口の雲への思い入れが深く、それを最も感じる「八朔」の季語を好んで使った。

1686年 (558.09.01作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京